

東日本大震災復興支援情報

●流失された町を行く、七夕の山車（陸前高田市） 芳賀日向（東京都）



東日本大震災後、関東各地の祭りは相次いで自粛した。かたや被災地では次々と祭り開催の声明を出した。犠牲者も多く被害甚大な中での祭り開催は大変なことだ。祭りの原点とは何か、被災地各地の祭りの取材を続けている。地元の行政と市民が一体となりいち早く復興をとげ、より発展を目指して例年通りの祭りを開催できた地域。行方不明者の死を現実として受け入れられず鎮魂祭で成仏させることができず、まだ一步が踏み出せない地域。先の光が見えず絶望という文字が頭の中をかすめながら、郷土の祭りを続けた地域など様々な思いがあった。

岩手県陸前高田市では、12台の七夕山車のうち9台を津波で失いながら、大石地区では泥に埋もれた一台の山車をボランティアたちの支援によって復元し、「元気を出すぞ、一步前に踏み出すぞ」と祭りを通じて発信した。かつての駅前繁華街を山車が行くが、その繁栄の地は跡形もない。「町の中のどこに山車がいても、良く見えるようになった」と地元の女性が涙ぐんで言った。

●写真レスキューその後 中島眞理（東京都）

4月初めから毎週末、写真修復のため1～2泊の予定で石巻の避難所に通った。被災者の方々がやっと手にした1枚の写真や、自衛隊が掘り起こしてくれたアルバムなど、一度は持ち主の手を離れて傷ついた写真を修復すべく、大切に持ち帰った。東京の事務所で、洗浄できるものは洗浄、そしてスキャンして紙焼きを作って、という一連の作業に様々な生活を垣間見たりもして、出来上がりに喜んだ顔が見られると本当にうれしかった。

石巻の人たちからは「もう住民票移した方が良

いんでないの」と言われるほど頻繁に通っていたが、やがて仕事の都合で出向くことが難しくなったので、石巻市のホームページや口伝えによって、修復希望者から東京まで写真を宅配便で送ってもらい、修復して返送するという形態に変えた。しかし、季節は少しずつ変わり、送られてくる写真やアルバムは時間の経過とともに画像が消え、アルバムの台紙に溶け込んで紙がドロドロになって、初めの頃の写真とは、すっかり様子が変わってきた。

ある日、「亡くなった親父の写真がこのアルバムの中にあるはず、何とかそれだけでも持っていたい」という電話がありすぐにアルバムも到着した。しかし、海水や油、汚泥に3カ月近くも浸かっていたアルバムは、カビに覆われ小さな貝殻も付着し、ずっしりと水分を含んで重く、どんなに工夫しても乾くことはなく、ページは紙粘土をこねたような状態で、開くことはおろか中に写真



があるとはとても想像できない状態だった。一縷の望みを持って送られたものを、何もできずにお返しする辛さは、これまでに経験したことがないほど深く、悲しく、口惜しいものであった。

●福島第一原発20キロ圏内では

野上裕之（栃木県）

震災発生から1週間後に宮城県石巻市を訪れて以来、早くも7カ月が過ぎた。犠牲となった多くの人々に心よりご冥福をお祈りしたい。

私の居住地は、福島県に隣接する県である。そのため、避難している方々の苦難や長期化する原発問題を耳にするたびに、ひと事ではないという思いが生じる。反面、不自由なく日常を過ごせる環境下に身を置きながら、何も出来ない自分の無力さがもどかしい。

8月下旬、福島第一原発から20キロ圏内に立ち入った（許可を得た知人に同行）。圏内は、避難指示が出ているために人影はない。たまにすれ違うバスには、タイベック姿に防護マスクを装着した

作業員が乗り込んでいた。

第一原発に近い大熊町の鶏舎に寄った。人が餌を供給できない鶏は全滅だった＝写真。牛や豚などの同様の光景も目の当たりにし、人間や動物の命について考えさせられた。



●ひきこもり達の復興支援・岩手県宮古市

内堀タケシ（東京都）

社会や学校、人々から距離を置く「ひきこもり」と呼ばれる若者達が岩手県宮古市の震災復興支援に力を貸している。若年者復興支援サポートセンター宮古に泊まりながら、宮古市の街で側溝の泥かき出しや瓦礫の片付け、お年寄りのケアなどボランティアに汗をかいている。全国17の宿泊型自立支援施設から出向き、1週間程度の泊まり込みで震災の復興を手伝っているのだ。

平均年齢は31.5歳、全国で推計160万人とも言われるひきこもり。普段は専門の施設で社会復帰を目指し、合宿しながら農作業をしたりカウンセリングを受けたりしている。四国や関東から泊まり込みで来た若者達はそれぞれの施設で震災復興のボランティアの話を聞き、自分の意志でここ宮古に来たという。中には交通費などの費用もアルバイトで稼ぎ出し自費参加している者もいた。



8月のうだるような猛暑の日、ボランティア達は腰ほどの深さもある道路の側溝に入っ

て泥かきをしていた。悪臭を放つヘドロをスコップで掻き出し土嚢袋に詰め込んでいく。8月の照りつける太陽に汗は止まらない。撮影をしてもクラクラするほどの環境の中、彼らは文句も言わず黙々と働くのだった。取材を快諾した若者に話を聞くと「テレビやネットで見るのとは違っていた。現場に来てみないと分からない。震災被害

の実際を知り、ボランティアをした事は今後の自分に何か役立つかもしれない。今度は自分自身でボランティアを探し、参加してみたい」など驚くほどの前向きな意見を聞くことができた。

復興支援の現場を歩くと自分探しの若者に出会うことも多い。自分にできることは何か？を求め現地に赴き、自分自身の役割を発見し少しでも役に立とうと現場で汗をかいている。彼らもまた、震災の復興に向け力を注いでいるのだ。

自分には何ができるのか？復興は行動をしなければ変わらない。我こそが写真家という殻にひきこもっているのではないだろうか。人間として自らの殻を突き破る必要が今、写真家の側にある。

●「Hot Spot」

土田ヒロミ（東京都）

3月11日以降、私は迷っていた。

正に、津波が街を飲み込んでゆくテレビ映像に圧倒されスチール写真の限界に就いて、私は考え



「Hot Spot」：37.45N/140.29E/81M：予測21.63mSv/year（2011/06/17～20福島県測定）〈福島原子力第一発電所から約60km〉

せられていた。一体、スチール写真で何が出来るのだろうか。無力感に、手も足もでない状態で傍観者のままに陥っていくような不安を抱えていた。私にはスチールしかないことは、誰よりも知るところだ。自明なことだ。どのような作業が出来るか判らないが、ドキュメンタリストとして、日本の大転換になるであろうこの歴史に加わる。とりあえず、現場で考えてみようと思ったのが、6月。これまで日本について表現してきた私自身の作業を繋げてゆく為にもやらなくては、ならないのだ。過去の「俗神」などにも背中を押されるようなかたちで始まった。

特にヒロシマに永く拘っている一人として、フクシマの取材を中心に進めている。学者に因ると汚染の解決は、わたしの寿命を遥かに超える。中途半端な作業になる覚悟を承知で、「ただ今、この現在」に向かい合うという私の流儀で、やり遂げたいと思っている。（放射能汚染地域で入域を制限されていない福島原子力第一発電所から20km圏外の緊急時避難地域、計画的避難地域の汚染度の高い地域を撮影。）

「東日本大震災支援情報」の掲載記事を募集しています。総務までお寄せ下さい。